

# 彼方のナオミ

——谷崎潤一郎「痴人の愛」論——

浅 見 歩 惟

ナオミの魅力とは何かと問われ、即座に答えることのできる読者は存在するのだろうか。多和田葉子の（では、そもそもナオミがどうして魅力的なのかについて譲治がどう説明しているかを詳しく見ていくと、ただただ西洋的であるという一点に尽きていて、その他には、なんら魅力をもとめていないようなので、本当に驚いてしまいます）という感想がある。ナオミは魅力的な女だと思っていたのに、読み返してみると、実はその魅力が（西洋）によってしか説明されていない。「痴人の愛」の一読者である彼女の言葉の裏には、「西洋なんてものじゃない、ナオミには、もっと別の部分で魅力を感じていたはずなのに」が、おそらくは隠れている。では、それが（西洋）でないとするれば何か。新潮文庫本裏表紙の作品紹介には、下記のようにある。

生真面目なサラリー・マンの河合譲治は、カフェエで見初めた美少女ナオミを自分好みの女性に育て上げ妻にする。成熟するにつれ妖艶さを増すナオミの回りには、いつしか男友達が群がり、やがて譲治も魅惑的なナオミの肉体に翻弄され、身を滅ぼしていく。大正末期の性的に解放された

風潮を背景に描く傑作。知性も性に対する倫理観もないナオミは、日本の妖婦の代名詞となった。

（妖艶さ）（魅惑的なナオミの肉体）という言葉からは、ナオミが素暗らしい（肉体）を持った女性であり、それが男性の欲望を掻き立てる存在であることを思わせる。作品を読み手に紹介しようとしたときに焦点となるのはナオミという存在、とりわけその（肉体）なのだ。

やつぱり育ちの悪い者は争はれない、千束町の娘にはカフェエの女給が相当なのだ、柄にない教育を授けたところで何にもならない。——私はしみじみ云ふあきらめを抱くやうになりました。が、同時に私は、一方に於いてあきらめながら、他の一方ではますます強く彼女の肉体に惹きつけられて行つたのです。さうです、私は特に「肉体」と云ひます、なぜならそれは彼女の皮膚や、齒や、唇や、髪や、瞳や、その他あらゆる姿態の美しさであつて、決してそこには精神的の何物もなかつたのですから。（七）

なるほど、語り手である譲治本人も物語序盤で早々とう宣言している。だが、読者が「痴人の愛」を読み終わったときに

残るナオミの印象は、(肉体)という極めて物質的で(精神的の何物もな)いものだけなのであろうか。これもまた、何だからう気がする。

「痴人の愛」は谷崎潤一郎の前期を締めくくる傑作であり、その後の谷崎作品の成熟を考えるに際して非常に重要な位置を占める。この見解は自明だ。研究は極めて多岐に渡り、作家の実生活と作品との関わりを考察したもの、西洋人女性を持つ「白」への拝跪を主題としたもの、大正当時における日本の近代化・西洋化を軸として展開したもの、映画との関係に着目したものと、さまざまな方向性が示されてきた。とりわけ目立つのは、「語り」に主眼を置いた論だ。「痴人の愛」は、従来の作品からはつきりと区別される新しい話法を獲得している」との指摘は予てよりなされていたが、切り込んだ一人は佐伯彰一である。(あくまで物語のなかの「私」であり、仮託された語り手なのだが、同時に作中の動きにまきこまれつつ、わが身をさらしてゆく底の、不思議になまなましい参加者)である語り手が(時間のゆたかな流れを現出)し、その語りの(ひたすら、「読者諸君」の方に歩み寄ろうとし、むしろ自身の特異さを薄め、消し去ろうと努め)ようとするとする働きが読者を誘い込んでおり、これが「痴人の愛」に至って、谷崎が確実にわが物とし、以後絶えて、手離すことのなかった所のものであった」と述べる。もう一人は千葉俊二で、「痴人の愛」における一人称の語りが何故重要であるかといえば、勿論それがその後の谷崎文学でしばしば用いられる物語形式の先蹤をなしているからでもあるが、そればかりでなく一層重要なことは一人称小説と

して書くことによってはじめて谷崎が自己を完全に対象化して描くことが可能となったから)であり、物語最後にあらわれる「馬鹿々々しい」という自己否定と「惚れてゐる」から仕方がないという自己肯定の危い均衡)を(矛盾を矛盾のままに、二律背反を二律背反のままに描き出して、それでさしたる破綻もなく纏め上げることが出来たのは、ひとえにこの作品が一人称小説の形式によったから)だと述べる。

両論はその後の「痴人の愛」研究の下地となり、この「語り」を主題とした系譜にはいくつか「ナオミの魅力」に言及したものがあつた。たとえば平山智子は(読者は讓治の視点に従つて作品を読み進めていくのであるが、讓治のいわゆる「手に負えない悪女」としてのナオミとは異つたナオミ像を描き出)していることを指摘し、それは讓治が求めた(外面的)な(西洋)が実はナオミの(懸命な努力の上に成り立っていた作為的なもの)だということを読者に對して隠す(信用できない語り手)の効果であると述べる。大村治代は(讓治の「語り」の奥へ逐いやられてしまつて)いる(西洋人のような現実離れた希少な)「肉体という武器しか持っていない」ナオミは(からっぽ)であり、(讓治はその「からっぽ」な仮象の現実を具現化するためにナオミを養育し)、(疑似西洋)という(讓治の仮象の象徴へと回帰した)と述べる。永柴啓伸は野崎飲の論を受けて(語られるナオミ像と読者から読み取れるナオミ像との間には、微妙なズレや微量の不透明な領域が生じて)おり、(読者にとって)、一定のナオミ像など存在しない)という状態を作り出すには(語り手と読者の距離を、時に明確にし、時

に不明瞭に残すことが必要であり、これこそが〔痴人の愛〕が構造的に成功した要因〕であると述べる。

どの論者も讓治が語るナオミと読者が想起するナオミ像との間に差異が生じていることを指摘する。一読目の「読者」としての視点から二読目以降の「研究者」としての視点へ移ったとき、つまりテキストの詳細な読みを繰り返したとき、私たちはふと「ナオミの魅力とは何だったのか」という疑問を抱かざるを得ないのだ。しかし、前出の平山・大村はともに〔西洋〕・〔肉体〕という言葉によってナオミを説明しており、永栄も〔読者諸君〕と巧みに呼びかけられ、いつしか我々も、ナオミと西洋崇拜という構造に参加させられていくのである」と、結局は〔西洋〕によってナオミを説明している。だが、私たちが読者として「痴人の愛」を読了した際に浮かび上がってくるのは、〔西洋〕や〔肉体〕という言葉では捉えることのできない、何か漠然としたナオミの魅力ではないのか。本稿では、「痴人の愛」読者がナオミに対して〔西洋〕・〔肉体〕という言葉によらない魅力を明らかに感じてしまっているという事態が、どういった仕掛けによるものなのかを明らかにしたい。

\*

「痴人の愛」は讓治がナオミを語る物語であるが、語られる対象であるナオミが讓治の目の前から姿を消す場面も存在する。その意味で、作品は讓治がナオミと出会ってから（一―十九章）・ナオミが（お伽斬の家）を出て行ってから（二十―二十四章半ば）・再びナオミが（お伽斬の家）に戻ってから（二十

四章半ば）（二十八章）の三つに区切ることができよう。このうち一―十九章では讓治がナオミを評価しながら語っており、ナオミに対する肯定と否定とが絶えず繰り返される。

野崎歎は、〔結局のところ喪め称えられ崇拜的とされているナオミの姿は、読者にとつてついに明確な実像を結ぶことがないし、語り手のあまりの礼賛ぶり、惚れ込み方に、本物のナオミはそこまで称えられるに価する女なのだろうか、本当は単に安っぽいけばけばしい女にすぎないのではないかと疑わしく思わせもする〕と語る。（お伽斬の家）での生活を始めて間もなくすると、讓治は英語の才がないナオミに対して（自分が選択を誤つたこと、ナオミは自分の期待したほど賢い女ではなかつたこと）と失望し、〔肉体に惹きつけられ〕るようになる。しかしこの〔肉体〕は讓治ばかりでなく他の男性をも誘い、ナオミが（清浄潔白ではない）という事実は（ナオミの値打ちを、半分以下に引き下げ）、さらには（ほんたうの夫婦にならうぢやないか）すなわち（母親になつてくれないか）という最後の願いまでもが（いやだわ、あたし）（十八）と拒否される。英語の能力に欠け、夫以外の男にも体を許す娼婦性を持ち、妻という立場にありながら一緒に家庭を築くことも受け入れないナオミ。こう羅列すれば、ナオミは単なる娼婦・毒婦・悪女である。それにも関わらず、作品は（私自身は、ナオミに惚れてゐるのですから、どう思はれても仕方がありません）という讓治の言葉で締めくくられる。

では、ナオミを評価しながら語る讓治の内面はどのようなものなのか。実は作品のなか、とりわけ（讓治がナオミと出会っ

てから（一十九章）では讓治がナオミを評価する際の基準が揺れ動いているのである。

当時私は、それほど彼女の機嫌を買ひ、ありとあらゆる好きな事をさせながら、一方では又、彼女を十分に教育してやり、偉い女、立派な女に仕立てようと云ふ最初の希望を捨てたことはありませんでした。此の「立派」とか「偉い」とか云ふ言葉の意味を吟味すると、自分でもハツキリしないのですが、要するに私らしい極く単純な考で、「何処へ出しても恥かしくない、近代的な、ハイカラ婦人」と云ふやうな、甚だ漠然としたものを頭に置いてゐたのでせう。（六）

右の時点で讓治のなかに存在するのは、彼自身も認識するよ  
うに、（何処へ出しても恥かしくない）と（近代的）と（ハイカラ）とが混在する、（ハツキリしない）極めて曖昧な基準だ。  
讓治がナオミに興味を持ったきっかけはその西洋人を思わせる名前であり、（体が一層西洋人臭ひ）とナオミをひたすらに褒める。（「女優かしら？」「混血児かしら？」など、云ふ囁きを耳にしなが、私も彼女も得意さうに）（五）と、肯定とも否定とも取れる他者の発言も西洋好みの讓治にとっては褒め言葉以外の何者でもない。もちろん、ナオミが肯定される場面に限らず、シユレムスカヤ夫人との比較を通じてナオミが否定される場面にも西洋崇拜と呼べる讓治の価値観が浮き彫りとなっている。さらには、決して育ちが良いとは言えないナオミを（シンプル・ライフ）を求めるがゆえに（ナオミの家庭がさう云ふ風であつたことは、ナオミに取つても私に取つても非常に

幸だつた）（二）と肯定する。讓治がいかに（西洋）的な女性や（近代的）な生活を求めたかはすでに多くの先行論によって示されており、改めてここに説明する必要はないように思う。重要なのは、彼が（西洋）を善とする価値基準の他にもある基準を持ち合わせているということだ。

シユレムスカヤ夫人と同じく、ナオミを評価するにあつて比較対象とされる女性たちがいる。初めて鎌倉旅行へ出掛ける際、讓治は汽車で出会つた貴婦人たちとナオミとを比べ、（社会の上層に生れた者とさうでない者との間には、争はれない品格の相違がある）（四）と思うに至り、エルドラドオへ出掛ける場面では、女優である綺羅子とナオミが繰り返し比較される。讓治は心のなかで（不思議な事にかう云ふ真面目な衣裳を纏ふと、却つて彼女は下品に見え）（十）とナオミを否定し、舞踏会から帰る電車では（西洋人に淫売と間違へられて、而も簡単な英語一つしやべれないで、ヘドモドしながら相手になつたのは、菊子嬢だけではなかつたやうだぜ。それに此の女の、あの乱暴な口の利き方は何と云ふぞまだ）（十一）と、もはや暴言とも思える言葉を並べ、心のなかでナオミに（たしなみ）がないことを責め立てる。

しかし考えてみると、作品序盤において讓治は（シンプル・ライフ）を求めるがゆえに（何も私は財産家の娘だの、教育のある偉い女が欲しい訳ではないのですから）（二）と語っていたはずである。のちに（あの乱暴な口の利き方）（十一）と否定されるナオミの態度も、それ以前の（悪く云へば小生意気な此の鼻先の笑ひ方が彼女の癖ではありましたが、それが却

つて私の眼には大へん惻巧さうに見えた(三)というナオミ  
元来の癖を譲治自身が(たとひナオミが惻巧な女でないとして  
も、惻巧だといふ自信を持たせるのは悪くないことだ)と考  
えて(ナオミの惻巧がる癖を戒しめなかつたばかりでなく、却つ  
て大いに焚きつけて)(七)やった結果ではないのか。それ  
にも関わらず、ここではナオミが徹底的に否定されているのだ。  
では、ナオミと比較して肯定される綺羅子はどうな特徴  
を持つているのか。

たとへば彼女が、テーブルに就いてカクテルのコップを握  
つた時の、掌から手頸を見ると、実に細い。そのしつとり  
と垂れてゐる袂の重みにも得堪へぬほどに、しなくと細  
い。きめのこまやかさと色つやのなまめかしさは、ナオミ  
と孰れ劣らずで、私は幾度卓上に置かれた四枚の拳を、代  
るく眺めたか知れませんが、しかし二人の顔の趣は  
大変に違ふ。ナオミがメリー・ピクフオードで、ヤン  
キー・ガールであるとするなら、此方はどうしても伊太利  
亜か仏蘭西あたりの、しとやかなうちに仄かなる媚びを湛  
へた幽艶な美人です。同じ花でもナオミは野に咲き、綺羅  
子は室に咲いたものです。その引き締まつた円顔の中にあ  
る小さな鼻は、まあ何と云ふ肉の薄い、透き徹るやうな鼻  
でせう！ 余程の名工が拵へた人形か何かでない限り、赤  
ん坊の鼻だつてよもやこんなに繊細ではありませんまい。

(十)

右の場面において特徴的なのは、「西洋」がそれまでのよう  
に一括りではなく、(ヤンキー・ガール)のアメリカと(伊太

利亜か仏蘭西あたり)のヨーロッパとで分割されていることだ。  
が、それ以上に注目すべきは、このアメリカとヨーロッパの対  
立の間に「しとやかな日本」のイメージが存在することである。  
谷崎は「痴人の愛」から七年後の「吉野葛」を皮切りに、「盲  
目物語」「武州公秘話」「蘆刈」など、古典主義的作品を生み出  
した。ここに類される小説「春琴抄」には、春琴について以下  
のような記述がある。

当時は婦人の身長が一体に低かつたやうであるが彼女も身  
の丈が五尺にも充たず顔や手足の道具が非常に小作りで繊  
細を極めてゐたといふ。今日伝わつてゐる春琴女が三十七  
歳の時の写真といふものを見るのに、輪郭の整つた瓜実顔  
に、一つく可愛い指で摘み上げたやうな小柄な今にも  
消えてなくなりさうな柔らかな目鼻がついてゐる。(略)  
その臙臙とした写真では大阪の富裕な町家の婦人らしい気  
品を認められる以外に、うつくしいけれども此れという個  
性の閃めきがなく印象の稀薄な感じがする。

綺羅子は譲治によつて(伊太利亜か仏蘭西あたりの)とたと  
えられているものの、その様子は(小柄)な体格と(小作り)  
で(繊細)な顔と(気品)を持つ春琴を連想させる。これは  
谷崎のなかにある極めて古典的で日本的な美しさだ。ナオミと  
綺羅子の対比によつて浮かび上がるのは、(西洋)への崇拜で  
はなく、むしろ日本人女性の美しさを希求する譲治の姿なの  
はないだろうか。

譲治は一貫して(西洋)、そして(近代的)なものを求め統  
括しているように見えるが、実はこの(西洋)を善とする価値基

準の底には、極めて日本的であり前近代的な価値観が流れている。だからこそ、物語半ばでナオミの裏切りを知ったときに讓治が目論んだ救済措置は（お前、子供を生んでくれないか、母親になつてくれないか？）（十八）なのである。（西洋）を求めたはずの讓治だったが、同時に日本的な価値観も抱え込み、それが時折顔を覗かせる。

\*

讓治の内部における二項対立の構図については、たとえば田口律男の〈河合讓治の精神構造は、一方で、共同体の持つ因襲的体質を厭いつつ、（ハイカラ）で（自由）な都会生活を希求する要素と、その反面、都市生活に同化できず、（田舎育ちの無骨者）としての自己を苦々しく認めつつ、精神的基盤としての共同体に、あらがいがたい親和力を感じる要素とが、錯綜しつつ混在している〉という指摘があり、小森陽一は〈讓治の欲望は眼（常識）と身体に引き裂かれていたといえる。眼が求めたのは、彼がアメリカ映画からシミュレートした「シンブル・ライフ」であり、身体が求めていたのは、「もつと真面目な、常識的な家庭を持つと云ふ」ことにほかならなかつた〉と述べる。

ここで強調しておきたいのは、作品において「ナオミ」という存在が、こういった讓治の価値基準をもって評価されていることだ。すなわち、ある時は〈西洋〉的な美しさや〈シンブル・ライフ〉を善とする価値基準、ある時は〈常識的な家庭〉や日本古来の美を善とする前近代的な価値基準に照らし合わせ

るようにして語られているのである。だからこそ、讓治のナオミに対する評価は一直線でなく、肯定と否定とを繰り返すのだ。加えて重要なのは、大正当時の日本人の多くがこの価値基準のアンビバレンスを抱えていたと思われることである。たとえば物語の舞台となる大正六年から「痴人の愛」初出の十三年までの間の読売新聞の読者投稿欄「身の上相談」を見ると、（私が私は自由結婚をするのはいやなのです、矢張り世間並な結婚をしたい、然うしなければ親に申訳が立たぬ。人からも笑はれる、それが嫌なのです）という相談者がある一方で、（併し一歩進めて考へて見ますと、結婚といふものは世間体や義理立てによつて成立たすべきものではないと思ひます）という相談者もいる。社会的には夫婦という関係の讓治とナオミであるが、「結婚」一つ取つても、当時の人々のなかには相反する価値観が共存していたことが伺える。さらに、大正当時の新聞や女性雑誌を見てみると目を引くのは、「白粉」や「美顔白色剤」など、顔を白くするための化粧品の広告だ。二十五章で〈見馴れない若い西洋の婦人〉として登場するナオミの白さは、最終章で〈体じゆうへお白粉塗〉るという方法によるものだということが示唆されるが、当時は本物の〈西洋〉が手に入らないにも関わらず、〈西洋〉を目指して肌の上に〈白〉を塗りたくることが善とされていたのだ。作者である谷崎の西洋理解については中村光夫がその〈浅薄さと貧しさ〉を指摘して久しいが、この西洋に対する理解の〈浅薄さ〉こそが大正当時の一般人をあらわしていると言えるのではないだろうか。

讓治の設定については、予てより多くの指摘がなされてきた。

乙黒いつみは「痴人の愛」が（成功を収め、人気をかちえた）理由の一つとして（主人公讓治を常識人として設定したこと）を挙げて（ナオミがどれほど異常性を發揮しようと、讓治の健全性によつて作品は觀念的虚構の世界であることから免れ得る）と述べ、野口武彦は作品が（ブルーカラーがブルーカラーのためにかいた手記）だと分析、日高佳紀も讓治の（「サラリー・マン」としての社会的な凡庸さ）と指摘している。谷崎が意識的に大正時代の一般人である讓治を主人公として設定したであらうことは、「痴人の愛」以前の作品を見れば想像に易い。たとえば「痴人の愛」の前身とされる「肉塊」（大正十二年）をみると、主人公は高級映画の製作を夢見る男だ。彼は自身にその才能がないことを自覚しながらも、芸術の気高さに憧れ、映画づくりに没頭する。これと同年に執筆され、野口武彦によれば（小田原事件の渦中から生れた一対の双生児）の片割れである「神と人との間」の主人公もまた、芸術に通じた作家である。今日「スランプ」と評される谷崎の大正期においては実に多くの小説が生み出され、その主人公の大半は芸術に傾倒する男性であった。このなかにあつて、「痴人の愛」の主人公である河合讓治は極めて特異な存在だと言えよう。

私は電氣の技師であつて、文学だとか芸術だとか云ふものには縁の薄い方でしたから、小説などを手にすることはめつたになかつたのですけれども（四）

讓治のなかにある価値基準の揺れは、大正当時の日本人が抱えていたダブル・スタンダードによるものと言えよう。その感覚は、作中で繰り返し呼びかけられる（世間）の（読者）た

ちと十分に共有し得るものである。もともと外面的に一般人としての設定なされた讓治であつたが、内面にも一般人としての性質を付することにより、一層読者を語り手である讓治の側へと誘導することが可能になつたのではないだろうか。

さて、その上で指摘しておきたいのは、作中ではこの讓治に近しい人物がもう一人登場することである。

私は浜田に何遍となく、「ありがと〜」を繰り返しました。二人の間に年齢の相違、地位の相違と云ふやうなものになかつたら、そして私たちがもつと前から親密な仲であつたら、私は恐らく彼の手を執り、互に抱き合つて泣いたかも知れませんでした。私の気持は少くともそのくらゐまで行つてゐました。（十七）

（年齢）や（地位）に相違があるとの認識はなされているものの、ナオミを寝取つた憎むべき男として登場したはずの浜田が、これ以降には讓治にとつて親和性のある人物として描かれているのである。（ナオミが〈お伽噺の家〉を出て行つてから（二十一―二十四章半）では、そのなかの二十二―二十三章がおおむね讓治と浜田の對話のみで構成されている。内容は、言うまでもなく彼らを誘惑し、欺いてきたナオミという女についてだ。（讓治とナオミが出会つてから（一―十九章）においては、このナオミが一般人である讓治という人物の価値基準と照らし合せて評価されていることは先に述べたが、（ナオミが〈お伽噺の家〉を出て行つてから（二十一―二十四章半）ではこの評価に浜田の存在が影響していると考えられる。

しかし、手記の最終部に至つて讓治はナオミを否定的に評価

することを止め、自身に「痴人」というまなざしを向ける。

これで私たち夫婦の記録は終りとします。此れを読んで、

馬鹿々々しいと思ふ人は笑つて下さい。教訓になると思ふ人は、いゝ見せしめにして下さい。私自身は、ナオミに惚れてゐるので、どう思はれても仕方ありません。

ナオミは今年二十三で私は三十六になります。(二十八)

では、それまで「読者諸君」と呼びかけてきた譲治が「どう思はれても仕方ありません」と、そのまなざしを気にせず、理解を諦める姿勢へと転換するまでには作中で一体何が起きてゐるのだろうか。

\*

ナオミが「お伽噺の家」を出て行つて以降、(頭のなかには奇妙なナオミの幻ばかりが浮かんで来て、それが時々おくびのやうに胸をむかつかせ、彼女の臭ひや、汗や、脂が、始終むうツと鼻についてゐる。で、「見れば眼の毒」のナオミが居なくなつたことは、入梅の空が一時にからツと晴れたやうな具合でした)と、一時はナオミがいなくなつたことに胸をなで下ろす譲治だが、(そのせい／＼した心持が続いたのは、一時間ぐらゐなもの)(二十)であり、その後はナオミの幻想に取り憑かれる。

それは私が刺し殺しても飽き足りないほど憎い／＼淫婦の相で、頭の中へ永久に焼き付けられてしまつたまゝ、消さうとしてもいつかな消えずにゐたのでしたが、どう云ふ訳か時間が立つに随つていよ／＼ハッキリと眼の前に現れ、

未だにじーいつと瞳を据えて私の方を睨んでゐるやうに感ぜられ、而もだん／＼その憎らしさが底の知れない美しさに變つて行くのでした。考へて見ると彼女の顔にあんな妖艶な表情が溢れたところを、私は今日まで一度も見たことがありません。疑ひもなくそれは「邪悪の化身」であつて、そして同時に、彼女の体と魂とが持つ悉くの美が、最高潮の形に於いて発揚された姿なのです。(二十一)

このとき譲治のなかにあるのは現実のナオミではなく、(頭の中へ永久に焼き付けられてしまつたまゝ)のナオミが見せる(体と魂とが持つ悉くの美が、最高潮の形に於いて発揚された姿)なのである。その後も譲治は昔に撮影したナオミの写真を見て(こゝに至つてナオミの体は全く芸術品となり、私の眼には實際奈良の仏像以上に完璧なものであるかと思はれ、それをしみ／＼眺めてゐると、宗教的な感激さへが湧いて来るやうになるのでした)と言う。それまで肯定と否定とを繰り返されてきたナオミであるが、この二十章に至つてはひたすら肯定される。

注意を向けたいのは、このナオミに対する肯定が明らかにそれまでの(近代の)な(ハイカラ)を善とする価値基準によるものでも、その根底に流れる前近代的な日本を善とする価値基準によるものでもないことだ。確認したように、作品最初より譲治は「西洋人臭ひ」ナオミの(肉体)を評価していた。が、彼女の骨組みの著しい特長として、胴が短く、脚の方が長かつたので、少し離れて眺めると、実際よりは大へん高く思へました。そして、その短い胴体はSの字のやうに



非常に深く、くびれてゐて、くびれた最低部のところに、もう十分に女らしい円みを帯びた臀の隆起がありました。

(四)

その後には（脚と脚との間には寸分の隙もな）いことや（たつぷりとした立派な肩と、いかにも呼吸の強さうな胸を持つて）いたと語られることから、讓治がナオミの（肉体）を賛美するのは偏にそれが（西洋）人らしいからだということがわかる。この「西洋人のようだから善い」という判断は、前述の一般人としての価値基準に支えられたものであると言えよう。だが、二十章における（体と魂とが持つ悉くの美が、最高潮の形に於いて発揚された姿）という肯定からは「西洋人のようだから」という理由は見取ることができない。実体としてのナオミが消えて以降、讓治のなかからは一般人としての価値基準が消失しているのである。

だが、一度消失した一般人としての価値基準は、浜田の登場によつて取り戻されることとなる。（己はほんとに大変な女を逃してしまつた）（二十）と後悔の念に駆られる讓治は、二十章において浜田に電話を掛け、（君より外に頼りにする人がないもんだから）と浜田に協力を願ひ出る。しかし、浜田は讓治に（しかし河合さん、もうあの人はとても駄目です、あきらめた方がよござんすよ）と告げ、家を出たあとのナオミの素行が讓治の前に露呈する。それを聞いて讓治はナオミを（汚れた、売春婦のやうな女）であることに気づかされ、（この少年の、悲憤に充ちた、心の底から私の為めを思つてくれる言葉の節々は、鋭いメスで腐つた肉を抉り取るやうな効果がありました）

と語る。浜田の言葉にこのような効力がある理由は、おそらく（嘗ては私と同じやうに熱烈にナオミを恋した浜田、そして私と同じやうに彼女に背かれてしまつた浜田）という共感にあると考えられる。

思えば、浜田はそれ以前に（けれど、けれどあなたは、どうかナオミさんを捨てないで上げて下さい）（十七）と讓治に話していたはずである。しかし、その浜田をもつてしてもナオミの行動には目に余るものがあつたのであろう。

「（略）何しろ家庭が悪かつたんです、僕も今になつて、しみみそれを思ひますよ」

「そう聞くと、尚更恐ろしくなしますなあ、ナオミさんには生れつき淫蕩の血が流れていたんで、ああなる運命を持つていたんですね、折角あなたに拾ひ上げて貰ひながら、

――

物語中の（世間）とも言える浜田がナオミを見放したとき、それに引きずられるように讓治もナオミを否定する。この価値基準となつてゐるのは、（家庭）や（生まれ）という前近代的なものであり、それはすでに讓治のなかから失われたはずのものであつた。ここで終わつていれば、讓治が（世間）の枠を脱することはなかつたのかも知れない。しかし、彼は一人（痴人）への道を辿る。（再びナオミが（お伽断の家）に戻つてから（二十四章半は二十八章）において、西洋人のやうな容貌をしたナオミが家へやつてきて以降、またもや一般の価値基準とはまったく別のところでナオミを肯定し始めるのだ。

肌の白さに至つては、いくら視詰めても全く生地の皮膚の

やうで、お白粉らしい痕がありません。それに白いのは顔ばかりでなく、肩から、腕から、指の先までがさうなのですから、もしお白粉を塗つたとすれば全身へ塗つてゐなければならぬ。で、この不可解なえたいの分らぬ妖しい少女、——それはナオミであると云ふよりも、ナオミの魂が何かの作用で、或る理想的な美しさを持つ幽霊になつたのぢやないかしらん？ と、私はそんな気さへしました。

(二十五)

ここで語られるのはナオミの肌の白さであるが、西洋人の象徴としての「白」ではなく、もつと抽象的な（或る理想的な美しさ）が肯定されているのである。ナオミの実体が目の前に存在するにも関わらず、だ。さらにナオミが二階へと姿を消してからもその姿は（私の胸にはたゞ今夜のナオミの姿が、或る美しい音楽を聴いた後のやうに、恍惚とした快感となつて尾を曳いてゐるだけ）、（そして私のやうな男はたゞその前に跪き、崇拜するより以上のことは出来ないところの、貴い憧れの的）と、非常にあいまいな言葉によつて讚美される。譲治は《ナオミと出会つてから（一〇九章）》において《近代的》・《西洋》あるいは前近代的・日本らしいという二律背反する一般的価値基準を持ち、この基準を《ナオミが（お伽断の家）を出て行つてから（二二〇―二四章半ば）》で一度消失するものの、再び手に入れる。そして《再びナオミが（お伽断の家）に戻つてから（二四章半ば）―二十八章》において、またも価値基準を手放すのである。作品終盤でもナオミの《肉体》は譲治の語りの対象となるが、これもそれまで基準であつた《西洋》とは明らか

に異なる次元で表現されている。

かうして見るとその美しさは巨人のやうな偉大さを持ち、容積を持つて追つて来ます。その恐ろしく長く切れた眼、立派な建築物のやうに秀でた鼻、鼻から口へつながつてある突元とした二本の線、その線の下に、たつぷり深く刻まれた紅い唇。あ、これが「ナオミの顔」と云ふ一つの靈妙な物質なのか、この物質が己の煩惱の種となるのか。

(二十七)

《西洋人》を体現した《肉体》の様子は皆無であり、ナオミの肉体はただただ物質的に描かれている。二十章、二十五章に登場する極めて形而上的な《彼女の体と魂とが持つ悉くの美が、最高潮の形に於いて発揚された姿》あるいは《或る理想的な美しさ》の対極にある形而下の美ではあるが、どちらも一般的大正人としての譲治の価値基準の外にあるものであることに違ひあるまい。

しかし、《西洋的》な《肉体》、あるいは前近代的な《母》という価値観からは離れているものの、実は《再びナオミが（お伽断の家）に戻つてから（二四章半ば）―二十八章》には、一般的価値基準の内側のものと外側のもの、形而上のものと形而下のもの、そのどれともつかない肯定が存在し、錯綜しているのである。

浜田との対話でナオミを《汚れた、売春婦のやうな女》と否定したはずの譲治は二十六章においてナオミの《淫婦の肌》に惹かれ、この淫婦性の肯定は作品最後まで《彼女の浮気と我が儘とは昔から分かつてゐたこと》で、その欠点を取つてしまへば

彼女の値打ちもなくなつてしまふ」と肯定され続ける。その後  
はまた「私はしばし想像の世界で、彼女の全身の衣を剥ぎ取  
り、その曲線を飽かずに眺め入ることを余儀なくされました」と  
「想像」のなかのあいまいな世界へ入り、今度は「友達の接  
吻」と称されるナオミの息に惑わされる。

彼女の息は湿り気を帯びて生暖かく、人間の肺から出たと  
は思へない、甘い花のやうな薫りがします。(略)——私  
は斯う、彼女のやうな妖婦になると、内臓までも普通の女  
と違つてゐるのぢやないか知らん、だから彼女の体内を通  
つて、その口腔に含まれた空気は、こんななまめかしい匂  
がするのぢやないか知らん、と、ようさう思ひひくしまし  
た。(二十六)

そうかと思えば、また「想像」におけるナオミが登場する。  
着換へをした時にちよいと着物の裾から洩れた足である  
か、息を吹つけてくれた時について二三寸傍まで寄つて来  
た唇であるとか、さう云ふものがそれらを実際に見せられ  
た時より、却つて後になつて一と入まざりと眼の前に浮  
かび、その唇や足の線を伝はつて次第に空想をひろげて行  
くと、不思議や実際には見えなかつた部分までも、恰も種  
板を現像するやうにだん／＼見え出して、遂には全く大理  
石のヴァイナスの像にも似たものが、心の闇の底に忽然と  
姿を現はすのです。(二十六)

このうち、二十七章ではナオミの「肉体」が物質的に語られ、  
直後には恋する男性としては極めて一般的、普通、と言える讓  
治の内面が描かれる。

……これは私の恋の古蹟だ。私の手が、私の指が、此の凄  
艶な雪の上に嬉々として戯れ、此処を自由に、楽しく踏ん  
だことがあるのだ。今でも何処かに痕が残つてゐるかも知  
れない。……

以上のように、讓治は一般的価値基準の外側でナオミを肯定  
し始めるものの、作品終盤では相反する性質の肯定が混在し、  
讓治が語る「ナオミ」が一つの焦点を結ばなくなるのである。

\*

十九章において、讓治は「出て行け」という言葉でナオミ  
を拒否する。作中でこの破局の直接的な原因として描かれるの  
は「ナオミが未だに熊谷と関係を断つてゐないと云う動かぬ証  
拠」を讓治が発見したことであるが、このエピソードの直前には  
純日本的な家を用意し、ナオミを「もつと立派な奥さんらし  
く」という企てを否定される讓治の姿があつたことを見逃  
してはなるまい。「近代的」な「偉い女」になるようナオミを  
「教育」とするという野望はとうの昔に消え、今度は「母」にな  
ることを求める。しかしこの願ひもむなしく散つたとき、ナオ  
ミとの破局を迎えるのである。それまで、「近代的」・「西洋」  
あるいは前近代的・日本らしいという二律背反する一般的価値  
基準を持つていた讓治は、ナオミがそのどちらも実現し得ない  
という現実を突きつけられるのだ。

しかし作品を読み返してみると、一般的な価値基準では測る  
ことのできないナオミへの讚美は、それ以前にもひっそりと配  
置されている。

かういふ経験は、若い時代には誰でも一度あることでせうが、私に取つては実はその時が始めて了した。私は電氣の技師であつて、文学だとか芸術だとか云ふものには縁の薄い方でしたから、小説などを手にすることはめつたになかつたのですけれども、その時思ひ出したのは嘗て読んだことのある夏目漱石の「草枕」です。さうです、たしかあの中に、「ヴェニスに沈みつ、ヴェニスは沈みつ、」と云ふところがあつたと思ひますが、ナオミと二人で船に揺られつ、沖の方から夕霧の帳を透して陸の灯影を眺めると、不思議にあの文句が胸に浮んで来て、何だか斯う、此のま、彼女と果てしも知らぬ遠い世界へ押し流されて行きたいやうな、涙ぐましい、うつとりと酔つた心地になるのでした。私のやうな武骨な男がそんな気分を味はふことが出来たゞけでも、あの鎌倉の三日間は決して無駄ではなかつたのです。(四)

右は讓治とナオミが初めて鎌倉旅行をする場面であるが、  
〔伊太利語でうたふ彼女のソプラノ〕は讓治に「涙ぐましい、うつとりと酔つた心地」すなわち、理由の存在しない、一般的価値基準の外で評価された善さを与える。これに近しい感覚は、下記の場面にもあらわれる。

ナオミは一体、その肌の色が日によつて黄色く見えたり白く見えたりするのですが、ぐつすり寝込んでゐる時や起きたばかりの時などは、いつも非常に冴えてみました。眠つている間に、すつかり体中の脂が脱けてしまふかのやうに、きれいになりました。普通の場合「夜」と「暗黒」と

は付き物ですけれど、私は常に「夜」を思ふとナオミの肌の「白さ」を連想しないではゐられませんでした。それは真つ昼間の、隈なく明るい「白さ」とは違つて、汚れた、きたない、垢だらけな布団の中の、云は、襦袢に包まれた「白さ」であるだけ、余計私を惹きつけました。(略)「此れでは彼女の死顔もきつと美しいに違ひない」と、さう思つたことも度々ありました。私はよしや此の女が狐であつても、その正体がこんな妖艶なものであるなら、寧ろ喜んで魅せられることを望んだでせう。(十三)

肯定されるのはナオミの肌が持つ「白」さだが、それが「西洋」と結びついている訳ではない。「死顔」や「狐」という言葉を使いながら、人の世を超越した美しさが描かれているのだ。これは一般的価値基準の外にある肯定であり、二十五章で「狐のやうに白い肩だの腕だのを露わにした」(或る理想的な美しさを持つ幽霊)として登場したナオミと重なる。

前田久徳は「実体を欠いた美は觀念のまま浮遊を強いられ、作家は長い模索の時間を経験せねばならなかつたわけだが、この觀念的な美に肉体を与え実在感を付与するものとして、「西洋」が希求された」と述べ、二十五章で現れるナオミの「白」が「化粧法として解」かれることを挙げて「結果としては、この作品は「白」への限りなき憧憬を示したが、「白」自体の形象化は失敗に終わらざるを得なかつたものとせねばならぬ」と評している。<sup>30</sup> たしかに、実体を欠いた(或る理想的な美しさを持つ幽霊)のやうなナオミの描写からは、形而上の「白」を形而下へと落とし込もうとする谷崎を読み取ることができると

もしれない。しかし、作品最後に讓治を惹き付けているのは「観念的な美」のみではない。それまで持っていた価値観を手放した讓治を捕らえるために、作品は一般的価値観には沿うことのない「ナオミ」を少しずつ散りばめているのだ。彼女の持つ娯婦性、物質的に表現された肉体、「友達への接吻」、さらにはナオミが「私の恋の古蹟」であるという思いまでもが総出でナオミを照らし出してゆく。

作品において、ナオミは讓治が表立って求めた（近代的）で（偉い）女性像も、奥底で求めた前近代的で日本らしい（母）としての女性像も実現していない。それでも読者は「私自身は、ナオミに惚れてゐるのですから、どう思はれても仕方がありません」と語る讓治の姿を受け入れ、作品を読み終わった際には、ナオミに何かしらの魅力を感じている。それを可能にするのは、「世間」と共通し得る価値基準のなかに、その基準では測ることのできない魅力が登場させることである。作品は最後、讓治を常人から「痴人」へと変える。本来であれば、「痴人」としてナオミを肯定する彼を「読者」は受け入れられるはずもない。しかし、讓治が外面的にも内面的にも当時の一般的人物として設定されていることが、「読者」を「痴人」の地点へと導くことを可能にしているのだ。

ナオミの魅力とは何か、と問われたとき、私たちは答えられるはずもない。それは言葉で指し示すことのできない、決して一つの像を結ぶことのできないものだからだ。「西洋」的な（肉体）という理由ある魅力を超越しようとしたとき、その価値基準の外にあるものをいかにして読者に喚起させるか。谷崎

潤一郎の眼目は、ここにあるように思う。最終的に讓治は一般人としての価値基準を手放す。そしてその価値の外に、言葉の彼方にある「ナオミの魅力」をほんやりと、しかし確かにあるものとして浮かび上がらせた。

※本稿における谷崎潤一郎著作の引用は、すべて「谷崎潤一郎全集」（中央公論社、昭和五十六年五月）による。その際ルビは省略し、仮名遣いは原文通り、漢字は常用漢字に改めた。

注1 多和田葉子 講演「谷崎潤一郎と虚構としての『日本』」（ユリイカ 総特集 多和田葉子）青土社、平成十六年十二月）

2 新潮文庫「痴人の愛」（新潮社、平成二十五年六月）

3 「共同討議 谷崎の作品を読み直す」（『国文学解釈と教材の研究』學燈社、昭和六十年八月）では、紅野敏郎・今村忠純・千葉俊二・山田有策によって「痴人の愛」が昭和期の谷崎の出発点であるのか、あるいは大正期谷崎文学の集大成であったのか）について議論がなされている。問題は未だ解決を見ないが、どちらにせよ「痴人の愛」が谷崎潤一郎を考えるにあたって重要な位置を占めることは確かであろう。

4 野村尚吾は「谷崎潤一郎 風土と文学」（中央公論社、昭和四十八年二月）のなかで谷崎の横浜生活が作品に大きな影響を及ぼしていることを指摘し、野口武彦は

【谷崎潤一郎論】（中央公論社、昭和四十八年八月）において小田原事件との関係を描きしている。

5

細江光は「痴人の愛」論——その白人女性の意味を中心に——（『国語と国文学』至文堂、昭和六十三年四月）のなかで谷崎にとつて「白」への憧れはすなわち「母」への憧れであると述べる。前田久徳は「美の拝跪者——谷崎文学の男性像」（『日本文学の男性像』世界思想社、平成六年五月）において作品では谷崎が「白」の具現化を試みていると指摘する。中野登志美「谷崎潤一郎『痴人の愛』論——『痴人の愛』に於ける拝跪の美学——」（『日本文芸研究』関西学院大学日本文学会、平成十四年十二月）では、讓治の西洋拝跪の姿勢が「馬乗り」の場面にあられるとの考察がなされている。

6

五味測典編は「われわれの内なる（アメリカ）——『痴人の愛』と（排日移民法）言説——」（『日本近代文学』日本近代文学会、平成十四年十月）において、作品と当時のアメリカ表象との間に深い関わりがあることを指摘する。南明日香は「痴人の愛」と「文化生活」の言説（『国文学研究』早稲田大学国文学会、平成十四年十月）において（シンプル・ライフ）に焦点をあてて考察している。

7

千葉俊二は「痴人の愛」（谷崎潤一郎）（『国文学解釈と鑑賞』至文堂、昭和六十二年十月）において、「ナオミとはまさに映画という大衆の欲望を増殖しつ

づける装置が生みだしたセックスの女神たちをモンスタージュエして創りだされた一つのイメージだった」と述べる。近年では種田和加子が「映画というテクストを読む——『顔』の変容、あるいは呼び交わす情感」（『国文学解釈と教材の研究』學燈社、平成二十年十二月）のなかでナオミの「顔」に着目して論じている。

8

前掲4 野口武彦「谷崎潤一郎論」

9

佐伯彰一「物語芸術論——谷崎・芥川・三島——」（講談社、昭和五十四年八月）

10

千葉俊二「痴人の愛」序説」（『芸術至上主義文藝』芸術至上主義文藝学会、昭和五十四年十一月）

11

平山智子「痴人の愛」——読者の想像から生まれるナオミ——」（『日本文学研究年誌』金沢女子大学日本文学研究室、平成五年二月）

12

大村治代「谷崎文学における分水嶺としての『痴人の愛』」（『国文学研究ノート』神戸大学「研究ノート」の会、平成八年二月）

13

野崎欽「痴人の愛」と外国語のレッスン」（千葉俊二／アンヌ・バヤール・坂井編「谷崎潤一郎 境界を超えて」笠間書院、平成二十一年二月）

14

永栄啓伸「ナオミは変わったか——『痴人の愛』の語り——」（『芸術至上主義文藝』芸術至上主義文藝学会、昭和二十五年十一月）

15

前掲14

16

前掲13

- 17 中谷元宣は「痴人の愛」の構造——〈混血児〉としてのナオミと讓治の《社会》意識をめぐって——〔国語と教育〕大阪教育大学国語教育講座／大阪教育大学国語教育学会、平成十年三月)のなかで、谷崎作品における〈混血児〉が〈大そう恠巧さう〉な〈西洋人〉からかけ離れたものであることを指摘しており、〈それなのに讓治は、周囲《社会》から《混血児》のようだとされるナオミについての客観的評価に耳を傾けず、主観的に《西洋人》のように〈たいそう恠巧さう〉に見えるだけ〉と述べる。
- 18 野口武彦は「近代文学の読み方(一)」(三好行雄編、有斐閣、昭和五十四年八月)のなかで、谷崎作品の時代区分について、昭和初年から十年代前半までを「古典回歸」の時代」と説明している。
- 19 田口律男「谷崎潤一郎「痴人の愛」を読む——一九二〇年代・都市・文学(一)——」〔近代文学試論〕広島大学近代文学研究会、昭和六十二年十二月)
- 20 小森陽一「都市の中の身体／身体の中の都市」(佐藤泰正編「文学における 都市」笠間書院、昭和六十三年一月)
- 21 「読売新聞」朝刊(大正十一年九月七日「身の上相談」)
- 22 「読売新聞」朝刊(大正六年二月十八日「身の上相談」)
- 23 たとえば「痴人の愛」が「女性」に連載されていた当時の「朝日新聞」(大正十三年三月)には〈御園白粉〉の広告、雑誌「少女世界」(大正十三年三月)には〈レット水白粉〉や〈美顔白色剤フロラー〉などの広告が掲載されている。
- 24 中村光夫「谷崎潤一郎論」(新潮社、昭和三十一年四月)
- 25 乙黒いつみ「痴人の愛」試論」〔国文目白〕日本女子大学国語国文学会、昭和五十九年二月)
- 26 小森陽一・野口武彦・山田有策／東郷克美司会「《シンポジウム》方法の可能性を求めて——「痴人の愛」を読む——」〔日本近代文学〕日本近代文学会、昭和六十一年五月)
- 27 日高佳紀「痴人の愛」における《教育》の位相」〔日本文学〕日本文学協会、平成九年五月)
- 28 前掲4 野口武彦「谷崎潤一郎論」
- 29 「《シンポジウム》方法の可能性を求めて——「痴人の愛」を読む——」(前掲26)において、野口武彦は谷崎の大正期について〈大正のスランプの時代〉と明言している。
- 30 前田久徳「痴人の愛」試論——主題と方法の背面——」〔国語と国文学〕至文堂、昭和五十五年一月)
- (本学大学院博士課程)